



平安時代の京都

はじめに

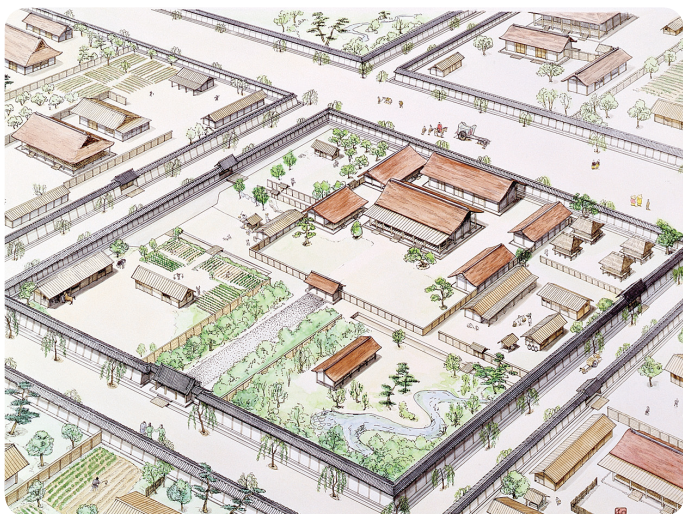
都は、桓武天皇により平城京から延暦3（784）年に長岡京に遷都がなされました。その10年後の延暦13（794）年に、桓武天皇は都を平安京に遷しました。

平安京は、山背国の愛宕^{おたぎ}・葛野^{かどの}郡（現京都市）に置かれ、明治2（1869）年の東京奠都^{てんとと}まで続きました。新しい都へと遷都し、当時の京都の国名も「山背国」から「山城国」に変更されました。

平安京が置かれた山城北部は、桂川・賀茂川（鴨川）・宇治川・木津川、さらにそれらが合流した淀川が流れており、水上交通の著しく発達した地域でした。

さらに、陸上交通においても同様に、北陸道（山背道）、山陰道（丹波道）が通過していました。水陸交通の利便は、古代宮都の備えるべき必須条件で、平安京造営の理由の一つといえます。

また、山城国には、その直前の都であった長岡京のほか、南山城の地に聖武天皇の恭仁京（740年）が置かれたことがありました。山城国への選地には、渡来系氏族である秦氏が深く関わったことも指摘されています。



右京一条三坊九町の邸宅復原図（早川和子作画）

平安時代の京都

平安京はどんな都だったのか

平安京の平面形態は、唐の宮都長安城をモデルとして、これに日本独自の特色が加味されて設計されました。中軸線をもち左右対称であること、宮域と京域が分離されていることなどは長安城に類似していますが、南北が長いこと、大きさが長安城の3分の1以下にすぎないことなど相違する点もあります。

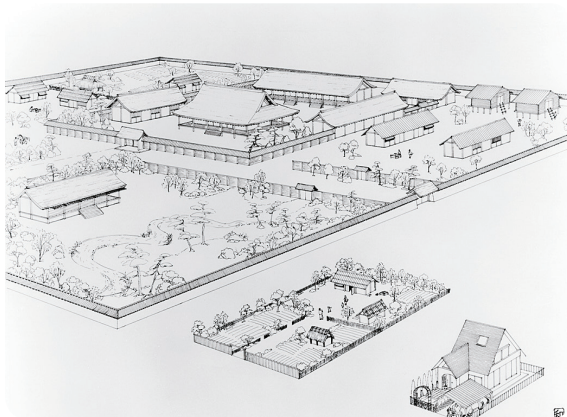
平安京は、東西4.5km、南北5.2kmの広さで、中央北寄りには宮域（大内裏）があり、その東・西・南面に京域が広がっていました。中央には幅84m（28丈）の朱雀大路があり、平安京の正門ともい**うべき**羅城門と宮域の入口の朱雀門とを結んでいました。平安京のメインストリートである朱雀大路は、現在の千本通にあたります。

条坊は一条大路を北限とし、南限の九条大路間に11本の大路、東京極大路を東限として西限の西京極大路間に13本の大路があり、南北を9区分（条）、東西も大路を基準に左京と右京でそれぞれ4区分ずつに分割（坊）されました。

条と坊によって区画され、この坊という区画は東西南北に走る小

路によってさらに16町分に区画されます。この16町分に区画された一区画が1町になり、1町（約120m四方）が都における宅地配給の基準になりました。

京域は左右の京職が管轄し、畿内・七道といった一般行政区画とは異なった特別区とされました。



古代と現代の住宅の大きさを比較

左：奈良時代の貴族の邸宅

中：平安時代の庶民の宅地

右：現代の一般的な住宅地

平安京内の住まい

平安貴族や役人は夜明けの鐘とともに、各部署のある朝堂院にむかい、通常、午後には勤務を終えているようです。京内には、この



天皇が政務を行う大極殿を再現した平安神宮

平安貴族、下級役人、庶民が住んでいます。律令時代、都のなかでは人は自由に住まいを選ばませんでした。この場所に敷地をかまえなさいという指示、命令がありその敷地に住みます（宅地班給）。資料によると平安時代初期には150名程度とも言われる皇族・三位以上の高級貴族は120m四方＝1町（約14,400㎡）以上の敷地が与えられました。一方、下級役人は16分の1町、庶民は最小単位の32分の1町（約450㎡）と決められていました。

平安京の変容

桓武天皇が「此の国、山河襟帯、自然に城と作す」と、理想の都とした平安京。この平安京も100年を経過して変容していきます。

平安京へ遷都して12年後の大同元（806）年、桓武天皇が死去し、平城天皇が即位します。この頃には平城天皇を含めてまだ平城京への想いがあったようで、平城京にもどることも議論されました。弘仁元（810）年、平城天皇（上皇）の寵愛を受けた藤原薬子の乱による平城遷都は失敗し、平城京からの永遠の決別となりました。

嵯峨天皇の時代は弘仁、そして後の貞観の頃に平安文化が隆盛しますが、貞観18（876）年に大極殿は焼亡し、天皇は内裏から『里内裏』へ移り、内裏が空洞化していきます。

天徳4（960）年には内裏が全焼、大極殿・内裏の再建がおこなわれますが、何度となく火災にあい、治承4（1177）年・5（1178）年の火災（太郎焼亡、次郎焼亡）後、大極殿以下、八省院等が再建

平安時代の京都

されない状態でした。天皇は内裏・大極殿ではなく、「里内裏」に住み、ここに律令国家の崩壊が見られます。

朱雀大路を挟んで西の右京は、桂川に近く低湿であったため衰退していき、荒れた土地になったり、農耕地へと変わっていったことが、天元5（982）年の『池亭記』と呼ばれる日記（慶滋保胤著）に記されています。一方、左京は宅地が密集・発達し、さらに一条大路を越えて北野、東京極大路を越えて鴨川周辺、さらに白河街区へと新たに市街が展開し、平安京の形は変化していきました。

発掘調査でもその様子がうかがえます。市街が拡大していった左京北辺三坊、左京五条三坊十一町などの左京域の調査では、近世・中世の遺構が重複していることから、平安時代の遺構が残る状況は期待できません。右京一条三坊九町などの右京域では、早くに衰退していったことから近世・中世の遺構・遺物が少なく、平安時代の遺構が近世・中世の遺構に壊されずに見つかる傾向にあります。

鴨川は平安京の京外ですが、鴨川の東（洛東）にまで人家が進出し、11世紀後半になると、白河天皇造営の法勝寺をはじめとした『六勝寺』と呼ばれる天皇の御願寺が造られるようになります。白河天皇は譲位後平安京の南に、後院（鳥羽殿）を造営します。11世紀中頃には、時の権力者であった藤原道長が宇治に別業（別荘）



礎石や雨落溝が残る観音堂（尊勝寺跡）

を建てます。道長の長男頼通は、宇治の別業を寺に改め平等院を造営します。都を離れ、天皇・皇族・貴族は御願寺、別業を京都周辺に造り、そこから都周辺部が繁栄していきます。都では商工業に励む町へと変貌してい

きます。

庶民の暮らし

平安京の京内に暮らしていた人は12万人とも言われています。『源氏物語』など平安貴族の優雅な生活を思い浮かべる人が多いでしょうが、実際の都のなかでは、庶民は優雅という言葉とはほど遠い生活をしていました。



平安時代の土器（左京一条二坊十四町）

庶民の多くは持ち家がなく、貴族の屋敷で仕事につきますが、健康を害し、働けなくなると、その勤めていた屋敷から追い出されます。その後、亡くなってしまったのか、路上に死骸が打ち捨てられている様子が『餓鬼草紙』に描かれています。

京に住む人々の排便是大路・小路の側溝に廃棄され、側溝の清掃を罪人に課すこともあったようですが、都の中は衛生面ではあまり良くなかったようです。そのため、赤痢などが流行し、多くの死体が河原に遺棄されたようです。また、都の造営のために北山などの森林が伐採され、その結果、鴨川などで洪水が起こることになったようです。

高級貴族、皇族は洛東や白河、鳥羽、宇治へと別荘を建て、一時の清涼感を味わえましたが、庶民は都での環境の悪化、商業の発展により貧富の差が大きくなったことが想像できます。

都を離れた地方では、役人の赴任、地方からの年貢の貢納などに街道の整備とともに港・津が整備され、水路・陸路とも発達したようです。国府や郡衙などの役所と駅家や津などの重要な拠点とを結び、情報や人の交流・ものの交易が盛んにおこなわれました。

（村田和弘）